

Title	名辞の理論：序
Sub Title	Theory of names : prelude
Author	藁谷, 敏晴(Waragai, Toshiharu) 西脇, 与作(Nishiwaki, Yosaku)
Publisher	三田哲學會
Publication year	1978
Jtitle	哲學 No.67 (1978. 3) ,p.23- 48
JaLC DOI	
Abstract	This article is a prelude toward Philosophy of Names. Name is one of the most crucial notions in the construction of logical systems, as we see it in the deep difference between Frege-Russell type quantification theory and Lesniewski's ontology, as well as for the philosophy of language. In this article, the authors have taken out one outstanding line of theory of proper name which has developed in close connection of symbolic logic with philosophy of language. Three stages are here distinguished : 1) Frege-Russell, 2) Strawson-Searle, 3) Donnellan-Kripke. In explaining the first stage, the difference between the languages of the, two authors is accentuated, for sometimes, they are treated together as if their theories were almost the same. The second stage is explained from the point of the theory of Presupposition, and the authors tried to make explicit how the notion of "proper name" should appear if we take this point of view. We do not think that this theory is completely true, but not completely false, either. This theory has some point. The third stage is strongly and essentially connected with the modal logics and their so-called Kripke-model structures, and an explanation of causal theory of names is given using the notion of Kripke-model structures. The authors have described the theories as they stand, for it is needed, tiresome as it is, in order to develop further the theory of names from our standpoint of view.
Notes	
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00150430-00000067-0023

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the Keio Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

名 辞 の 理 論—序—

藁 谷 敏 晴*・西 脇 与 作**

Theory of Names : Prelude

Toshiharu Waragai and Yosaku Nishiwaki

This article is a prelude toward Philosophy of Names. Name is one of the most crucial notions in the construction of logical systems, as we see it in the deep difference between Frege-Russell type quantification theory and Leśniewski's ontology, as well as for the philosophy of language. In this article, the authors have taken out one outstanding line of theory of proper name which has developed in close connection of symbolic logic with philosophy of language.

Three stages are here distinguished : 1) Frege-Russell, 2) Strawson-Searle, 3) Donnellan-Kripke.

In explaining the first stage, the difference between the languages of the two authors is accentuated, for sometimes they are treated together as if their theories were almost the same. The second stage is explained from the point of the theory of Presupposition, and the authors tried to make explicit how the notion of "proper name" should appear if we take this point of view. We do not think that this theory is completely true, but not completely false, either. This theory has some point. The third stage is strongly and essentially connected with the modal logics and their so-called Kripke-model structures, and an explanation of causal theory of names is given using the notion of Kripke-model structures.

The authors have described the theories as they stand, for it is needed, tiresome as it is, in order to develop further the theory of names from our standpoint of view.

* 慶應義塾大学大学院文学研究科博士課程 (哲学).

** 慶應義塾大学文学部助手 (哲学).

0 導 入

伝統的な論理学の教科書は、名辞分類を以って始まるのを常としていた。Ockham が述べている様に：

証明は文から成り、文は名辞より成る。そこで名辞は文の基本的な部分以外の何ものでもない (Ockham, 第一章)。

こうして、名辞に関する理論的考察は論理学に取って基本的な部分と見做されていたのであるが、又それにとどまらず、本論文では論じないが、特に現代論理学に於ける二つの全く異った体系、即ち Frege-Russell 流の量化理論と Leśniewski 流の量化理論 (通常 *ontologia* と呼ばれる) を生む決定的要因となったのである。

更に現代論理学の発生と共に意味論的問題が名辞に関して生じたことは衆知の事実だが、この問題は現在特に様相論理に関して論ぜられている。

こうした事情から名辞に関する理論を扱うことは十分な価値を有するのである。

本論は名辞中、特に興味有る範疇を成す所の‘固有名辞’をその記号論理学的文脈に於いて形成された一つの極めて際立った流れを扱うことを目論んでいる。

固有名辞の理論の展開の概略

名辞の理論の展開は大旨三段階に分けて論ずることができるだろう。

第一段階は現代論理学の発生と共に始まる。量化理論は必然的に固有名辞の文法範疇を要求したが、又一方では意味論的な問題が論理学的文脈で発生し、この解決を巡って以後の二段階の理論展開の起動力とも言える Frege の‘表現に関する意味と指示’の理論、又 Russell の記述理論が提出されたのである。両者の固有名辞論はしばしば一括した取扱いを受けることがあるが (Kripke [3]), これが妥当でないことは本論文で示されるだ

ろう。しかし一方又注意さる可き事は両者共に‘言語使用’の概念を表現と対象間の関係を論ずるに際して考慮していない点である。この事は Russell の‘真の固有名辞’観に関して極めて顕著である。

第二段階は Searle, Strawson を代表と数えて良い分析哲学的接近方法である。彼等は表現と対象間の関係は使用者が表現を使用する事に依って決まる事を確認する。従ってこの点で前段階と決定的に異っている。然しながら一方では彼等は、固有名辞の有効な使用(つまり世界の中から唯一の対象を引き抜いて来るといふ働き)の条件の理解を、その情報力の理解と本質的に同じであると考えていた。この点で彼等は本質上 Frege 的である。

第三段階は Donnellan-Kripke 等を中心に展開されている所謂‘名辞の因果説’と呼ばれる理論である。この理論の支持者達は大旨次の点で一致する。固有名辞はある存在者の名前としてある時導入されたという事、又導入された名辞が使用されるまでに到った過程は、名辞の(意味又は情報力として名辞内に内属するのでは無い)現在の使用をその指示する対象との関係に於いて可能にする本質的下部構造として把握されるのである。名辞は使用の歴史的因果の連鎖を通じて初めに導入された対象に直接結びついている。この立場に在っては、Russell の、‘真の固有名辞’の概念に近い立場となる。

1. 第一段階

Frege の固有名辞論

Frege に於ける固有名辞の概念は次の二点から論ぜられる可きである：

1. 表現構造論的観点,
2. 意味論的観点.

表現構造論的観点 彼は固有名辞に関しては極めて独特の理論を持っていた。彼の中心用語は**充足的表現**又**充足の対象**である。この観点から彼は次の様に固有名辞の定義を下している：

...私は‘記号’とか‘名前’で固有名辭、つまりその指示対象として（最広義の）一定の対象を持つ表現を理解する、従って…概念や關係を表わしているのでは無い…又單一の対象の表現は幾つかの語又はその他の記号から成る事も有る．簡單の爲にこれらの表現を固有名辭と呼ぼう (Frege [3], p. 27).

Frege にあっては彼が明白に表明している様に定義不可能な程に單純、従って最も基本的と見做されていた概念は関数 (Funktion) であり (Frege [9], p. 290). 表現とその指示対象が嚴密に區別される様に (Frege [2], p. 2), 関数に關しても関数自体とその名前が區別される．それら間の關係は：

関数名は常に(最少一つの)…通常は“x”で示される空座を持っている．然し項自体 (Argument) は関数には属さず、従って又文字“x”も関数名に属さない…それ故関数自体は非充足的 (ungesättigt) とか完成要求的 (ergänzungsbedürftig) と名付けられたのである．その名前が完結的指示対象 (abgeschlossene Bedeutung) を得る為には、項名に依って完成 (ergänzen) されねばならぬからである (Frege [4], p. 26).

彼にあっては、文も又充足的及び非充足的部分（つまり対象名と関数名）から成る複合体として把握されるのだが (Frege [2], p. 7), この文の関数部の指示対象がその表現の空座数に應じて概念とか關係とか言われ、彼が自己の學問的業績の中核を成す所と考えていたものである：

…概念を關係として把握する事．關係を二項関数として把握する事．概念の外延やクラスは私には第一義的でない．概念及び関数の非充足性．概念及び関数が本質的であるという事の認識 (Frege [7], p. 200).

固有名辭とは充足的指示対象の言語的表現であり、又言語的に空座を含まない完全な表現はその指示対象が存在する時には、その対象は充足的であり、表現はその名前である．従って：

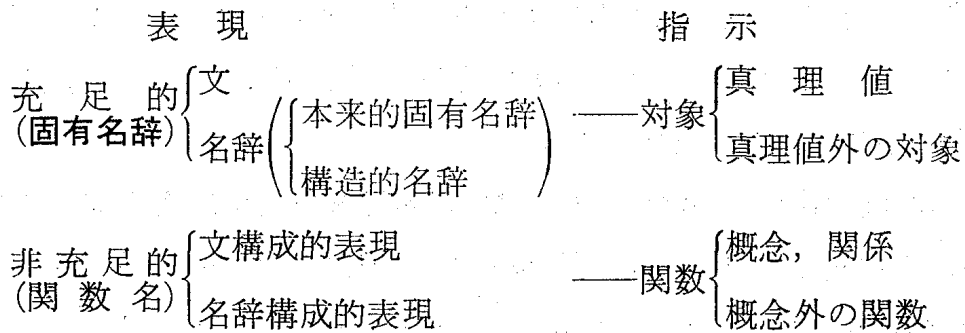
主張文 (Behauptungssatz) は空座を含まない．故にその指示するものは対象と見做される可きである (Frege [2], p. 18).

又、更に真理値が主張文の値であることを：

文も又その意味も、完結性 (Abgeschlossenheit) を持っていて、非充足的でない...(Frege [6], p. 88)

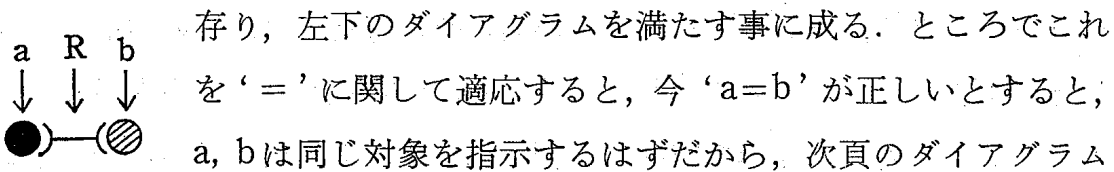
事を論拠として主張する (Frege [2], p. 34).⁽²⁾

こうして Frege では表現構造論的観点からは次の様な表現分類と固有名辞の位置付けを得る事となる。



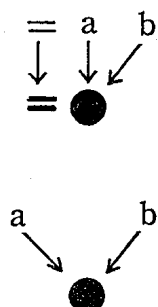
さて更に Frege は上記の‘名辞’を二分している様に思える。Frege [3] p. 23 脚注で彼は名辞 ‘Aristoteles’ を**本来的固有名辞**と呼んで他の言わば構造的な名辞とでも呼ばれる可きものと区別している。故に上記分類で、名辞は更に本来的固有名辞と構造名辞に二分さる可きである。

意味論的観点 Frege を表現の‘意味と指示’の理論に導いたものは、‘=’ (等値) を含む表現の情報性の分析である。Frege [3] 冒頭で彼は次の様に問う。まず、等値性は関係であるにしても、それは一体 1) 通常の関係の様に、表現の指示対象間の関係なのか、2) それとも形態的对象としてとらえられた (対象の) 名前の間の関係なのか。1) に対する答は否である。Frege は概念実在論を取っていたから (Frege [6], p. 86)⁽³⁾、例えば今表現 ‘Rab’ に対しては存在の側に各表現 ‘R’, ‘a’, ‘b’ に対応する実在が



を得ることになる。従って ‘a=b’ の真理性は実在側で $= \bullet$ が成立す

る事に他ならない．ところでこれは，‘ $a=a$ ’ が正に言う内容である．故に 1) ではない．又 2) でもない．若し單純に形態としての名前間の関係とすると，‘ $a=b$ ’ が真なのは，‘ a ’，‘ b ’ 間に ‘ a ’ と ‘ b ’ が同じ対象を指示する時のみ真である．ダイアグラムで表現すると，左下の様になる．ところがこの解釈も又充分とは言えない．表現 ‘ a ’，‘ b ’ が端的に記号それ自体として扱われる時，それらの意味は考慮に入れられず，従って ‘ $a=b$ ’ が真であるとしたら，それは高々 ‘ $a=a$ ’ が真であると同じ意味合いであり，従って ‘ $a=b$ ’ の情報性の説明とはならない．



この状況解決の Frege の方法は各表現は本質的に二重の機能を負っている，と主張する事だった．Frege [3] で彼は次の様に主張する：

固有名辭（語，記号，記号結合，表現）はその意味を表現し，その指示対象を指示する．一つの記号で我々はその意味を表現し，又その記号でその指示対象を指示するのである．

ここで‘記号の意味’で彼が意図するのは，‘指示対象の与えられ方の様式’つまり記号の指示対象の決定様式である (Frege [3], p. 26, 又 Frege [1], p. 8).

名辭と対象の関係に就いては，後に Russell との比較で重要な意味を持つ事と成るが，Frege は明らかに固有名辭が存在者の直接的ラベルである必要は無いと言う事を認識していた：

意味が把握されたからと言って，それが指示対象の存在の確かさを保証しはしない (Frege [3], p. 28).

然し一方では表現が指示対象を持つ時，表現が指示機能を持つのは‘使用’に依ってである，という明白な自覚が無い時代背景では，その機能は表現自体に内属していると考えられただろうし，Frege 自身の表現を考慮に入れても彼の見解では指示機能は（原則的に）表現に内属する事になると結論して良いだろう．

実際彼は表現の意味機能は本質的に表現に内属するものであると考える。それは完全な言語では表現に固着的に結びついた (pragmatic な要因に依らない) 定常的な機能である (可きである) と考えられていた事は次の主張からうかがい知れる所である:

固有名辞の形を取る文法的に正しく形成された表現は常に意味を持つ...
(Frege [3], p. 28),

又,

固有名辞の意味は言語又は記述の全体を充分に知るとの人に依っても理解される (Frege [3], p. 27).

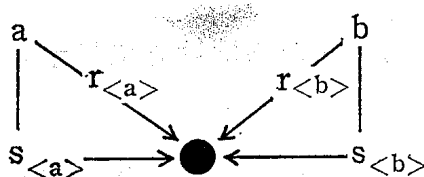
更に同論文28頁脚注から知り得る様に, 完全な言語に於いては一つの表現には唯一つの意味が対応しなければならないのである。

以上から Frege の完全な言語に関する固有名辞観は明らかであろう。彼は固有名辞 a を三つの要因から成ると考えているのである。今「 $*a$ 」で名辞 a の形態, $s_{\langle a \rangle}$ でその意味, $r_{\langle a \rangle}$ で指示機能を表わすと,

$$a = \langle *a, s_{\langle a \rangle}, r_{\langle a \rangle} \rangle$$

である。固有名辞は単なる記号ではなく, 記号自体, 意味機能, 指示機能から成る複合体である。今固有名辞 a に対する指示対象が存在すれば, 当然 $s_{\langle a \rangle}(a) = r_{\langle a \rangle}(a)$ である。

さて, 等値性の情報性に関する問題は次の様に解決される。‘ $a=b$ ’が正しいとすると, これが主張しているのは, $r_{\langle a \rangle}(a) = r_{\langle b \rangle}(b)$ であり, 情報性は $s_{\langle a \rangle} \neq s_{\langle b \rangle}$ という意味決定関数間の差異に依るのである。ダイアグラムで表示すれば, 左下の様である。



Frege と自然言語に於ける固有名辞 Frege は意味を表現内在の機能としたが, この考えは彼が固有名辞の例として使用したのが所謂記述名であったからである。ところでこれを自然言語にまで極性化すると, 彼の言う本来的固有名辞の意味が現

れる事になる。彼が自然言語を不完全としこの種の名辞の意味の不確定性又その決定への使用者の関与を認めていた事 (Frege [3], p. 27 注, 又同 [8], p. 64), 又この意味の確定を個別使用者のみに限っていた事, つまり意味は個別使用者の関数であるとしていた事は注意される可きである。

更に注意す可きは, この種の名辞の意味を個的使用者がその名辞に与える記述である, と理解していた点である。この点は又 Strawson-Searle との関係で問題となろう。

Frege の固有名辞の理論的帰結 彼は名辞に本来的に二つの機能, つまり意味機能と指示機能を帰属させたが, これは後述の Russell, Strawson-Searle 両説に対して一つの理論的含意を持つ。

まず形態的にであるが Frege は構造的な名辞も固有名辞に入れる。この事は Russell は形態的に単純なもののみを認めたのに対立する。

又構造的な名辞も二重機能を持つことから, この点でも指示機能を形態的に単純な名辞のみに認めた Russell の記述理論に対立する。しかし一方, 構造的な名辞も又指示機能を持つことから, これは Strawson の立場と一致する, 又これは Kripke-Donnellan 説と対立する。⁽⁴⁾

Russell の固有名辞理論

固有名辞の条件と機能 Russell の理論は固有名辞の形態・機能に関して次の様な見解を持っていた:

固有名辞自体は単に事物を示す (point to) 手段に過ぎない (Russell [5], p. 254)

し又,

固有名辞とはその意味である所の個物 (individual) をその固有の権利に於いて所有し, 又その個物定直接に, 他の語の意味からは独立に指示している単純記号である (Russell [6], p. 174).

形態的に固有名辞は何よりもまず単純記号でなければならず, 従って記述句は既に形態的に固有名辞でない。

更に機能的には、固有名辞は直接に又必ず何かを名付けていなければならない：

若し“a”が（固有）名辞なら、それは何かを名付けていなければならない：何も名付けないものは固有名辞では無い…(Russell [6], p. 179).
即ち Russell は表現の固有名辞性について形能的及び機能的二重の条件を課している。機能的条件は更に極めて強い形で次の様に表現される：

偽である事が考えられない様な述語には何の意味も無い。つまり我々が語っている個物についての存在という様な概念が存ったとすれば、それが当てはまらない事は絶対に有得ない (Russell [5], p. 124).

そしてこの事を論拠として固有名辞に関しては、それに関して存在を付加する事も否定する事も無意味である事を主張するのだが (Russell [5], p. 233), 後述する彼の理想とする言語を考慮に入れる時、その言語と世界との関係はまさしく Strawson 的 presupposition の関係なのである (Strawson [2]). つまり、Russell 的言語に於ける固有名辞性の定義は単に Syntax の観点からで無く更に本質的に Semantics の観点からの制限を含む。Russell に於ける固有名辞と世界との関係をまとめれば次の様になる。

表現‘a’が単純記号であることなしに、又世界の対応する存在を名付けずに固有名辞である事はできない。⁽⁵⁾

つまり、理想言語に制限すれば、Russell の固有名辞と Strawson のそれは近い。又、固有名辞に関しては存在、非存在は有意義には起り得ないことは重要な結論であり、事実、記述理論を支える理論的礎石の一つであった点は注意する可きである。

隠された固有名辞 Russell に於いては固有名辞は形態的単純性と指示対象前提性格を持つことが明らかになったが、後者の性格を巡って名辞は二分される。つまり形態的単純性を有し、なおそれについて存在を云々する事ができる表現が存在する。例えば、‘ホメロス’等である。ところで固有

名辞性はその指示対象前提性格を持つので、この様な表現は固有名辞でないことになる。又彼に依れば：

存在とは本質的に命題関数の性質であり、その命題関数が少くとも一つの例を持つ (Russell [5], p. 232)

事なのだから、この種の表現は実は命題関数から論理的に構成される隠れた記述句と解釈される事になる。(Russell [5], p. 233) 従って形態的に単純な固有名辞もそれに関する存在命題の有意味さに応じて、**隠れた記述句としての固有名辞と真の固有名辞**に二分される事に成る。

記述名辞と言語 Frege 的立場では意味機能は表現内在のものであったから、存在を云々し得る本来的固有名辞に就いてもそれを記述句に置き換え、その名辞を言語から消去してしまう事を要求しなかったのに対し、Russell 的観点では隠れた記述句としての固有名辞は表層的言語の十分な分析の結果真の言語では消え去る可きものである：

命題の文法的主語がその命題を無意味にする事無くその非存在が考えられる場合、その文法主語が固有名辞でない事は明らかである…。かくて全ゆるこうした場合に命題は文法的主語が消え去る様に分析されねばならない (Russell [3], p. 66, 又 Russell [2], p. 216 参照)。

かくて Russell 的言語では Frege 的言語に真向から対立し、固有名辞の情報内在性を認めず、唯何ものか**直接的ラベル**であるにとどまることが主張される。

記述理論の認識論的基盤 記述理論の提出は一つには幾つかの論理的逆理の解決の為だったが、解決を記述理論に求めなければならなかったのは彼の言語が**認識論的透明性**を固有、一般名辞に就いて要求していたからである。彼にとっては：

我々に理解可能な命題は…我々が見知っている (be acquainted with) 構成要素からのみ成る。見知らぬものは理解不能だからである (Russell [2], p. 231)。

そして認識論上の彼の基本テーゼは：

理解又は判断という関係が起る時、理解又は判断している精神が関係する諸存在は、精神が見知る所のものでなければならない (Russell [2], p. 221).

我々がある命題を理解できるとすれば、それはその命題を分析し、その命題に現われる語全体を我々が見知る所のものを表現する**透明な命題**に変形できるからであり、又事実彼が記述理論の理論的成果の中核を成すものと考えたのは、この理論が命題を透明な命題に変換する論理的手続きを提供してくれるという事だったのである (Russell [1], pp. 55-56).

個別的言語 彼が要求する言語の透明性の原則を守るなら、我々が語る言語は個人に依って変わる。見知るものの総体は各人で異り、具体的に言われた命題を理解する為には各人が各人の見知るものと直接かかわり合う透明な言語に変換する必要があるのだから、各人が使用する言語は究極的分析後には異らざるを得ない：

通常の話は、固有名辞さえも、事実上は記述句である。つまり固有名辞を使う人が心に思う事を正確に表現するには一般には名辞を記述に置き換える他は無い。更に、思われた事を表現するのに使用される記述句は人に依って、又同一人でも時間に依って異なる (Russell [2], p. 216).

従って Frege 同様言語は個人、又時間に依るが Frege では言語の不完全さからそうであるのに対して、Russell では人間知性と言語のかかわり上本質的に個別的なのである。

2. 第二段階

使用と指示 第二段階に於ける哲学者達の表現と指示対象に関する共通の理解は、言語は使用者と使用を介してのみ対象に関係する事ができる、と言う事である：

‘指示すること’は表現がする所のものでない：

それは表現の使用者が為す所のものである。指示する事は表現の使用の特徴である (Strawson [2], p. 8)。

意味 (Meaning) は表現の機能なのであるが、表現の指示対象が何であるかや文の真偽性は使用に依って決まるのであり、本質的に pragmatic な要因に依っているのである (Strawson [2], p. 9)。

固有名辞の情報性 ここで固有名辞で意味されるのは、Frege 流の表現を借りれば、本来的な意味での固有名辞である。従って、Searle が特徴付ける様に、1) 指示機能を持ち、2) 文脈に依ってその指示を変える事無く、3) 記述能力を持たない様な表現である (Searle [1], p. 93)。

ところが現実には、等値性や非存在に関して固有名辞のみを含みつつ、なお情報的である様な命題が存在する。‘ $a=b$ ’, ‘ a は存在しない’ 等である。‘ $a=b$ ’ に関しては、Frege が既に論じた様にそこに表われる名辞は意味を持たねばならぬ様に見える。‘ a は存在しない’ と言った時意図されるのは、‘ある性質の集合を持つものは存在しない’ であり、表現 ‘ a ’ は意味を持っている様に見える。こうして常識と理論的考察間の矛盾が生ずる：

固有名辞は指示機能のみを持ち意味を持たない様に見えるが、理論的考察はそれが意味を持たねばならぬ事を主張する (Searle [2], p. 136)。

この問題意識は Russell と Frege の総合であり、彼等 (特に Searle) が画るのはこの二者の和合である。

同定記述原理 (principle of identifying description) Strawson 自身に理論的变化はあるが、彼が一貫して持ち続けている原理は、彼が同定知識の原理と呼ぶものである。A が b に就いて同定知識 (identifying knowledge) を持っていると言うのは、A が世界の中から b を他から撰択して抜き取る為の知識を持っていることである (Strawson [3], p. 77)。情報伝達は、話者一聞き手間に共通の同定知識が存在する事が前提条件となっていることは Strawson が彼の哲学的活動全体を通じて認める所である

(Strawson [5], p. 47). 一方、彼が [1] を書いた当時は、固有名辞の有効な使用を、少くとも話者がその名辞に対する同定記述を与えること、と同一視した様である。固有名辞 ‘a’ に関する同定記述とは ‘a は何か’ と問われた時、‘a は P である’ という形で与えられる、a を他から撰択的に同定するに足る記述 P を言う。固有名辞の有効な使用条件を論じて、彼は次の様に言う：

何を、又は誰をその固有名辞で指示しているかを知らずに、それを指示的に使うことはできない。言い換えれば固有名辞を記述で置き換える事ができなければならないのである...(Strawson [1] p. 181).

Searle も又この点に関しては一致している：

表現使用に於いて定まったものを指示する為の必要条件は、表現が同定記述か、又は必要な時に話者が同定記述を提供できる、ということである (Searle [2] p. 134).

固有名辞の前提理論 固有名辞の有効な使用条件を同定記述の提供能力と同一視する時これは Strawson の前提 (presupposition) の理論と一緒にあって、固有名辞の前提理論とでも言う可き説を Searle に提出させた：

普通には固有名辞は性質を述べたり、特性を指定したりしないが、その指示的用法は、それが指示しようとする対象の性質を前提する……、‘アリストテレス’ の指示的用法は**対象の存在** 及び **充分で又不定数の言明が真であることを前提している** (Searle [1] p. 94).

さて固有名辞の有効な働きは、それとその指示対象間に認定された規約に依ってであり、指示対象の持つ性質に依ってではない。指示機能は全く指示対象の性質に無関係に行われるのであり、固有名辞とその前提された記述とは同じでもないし、又内属的性質のものでもないから、前提された記述は**外属的なものである**。更に Searle は論じて、この記述の集合は**本質的に不定である**、と言う。若し一定なら、その論理積が当の固有名辞の役割を荷い得るからである。

これらより固有名辞の前提理論に於けるある表現の固有名辞性の定義は、次の様になると思う：

表現‘a’が固有名辞であるとは、形態的に単純な、又その有効な使用条件が 1) 指示に関しては直接かかわり合う可き対象を前提し、2) 意味機能に関しては本質的に不定の数の属性を外属的に前提している表現であることである。

結 論

この見解に従えば、固有名辞とは形態、有効使用に於けるその形態に対応する存在者及びその存在者が集める属性の *fuzzy set*、及び表現とその指示対象間の前提的關係又提示対象と属性間の前提的關係、及び指示機能より成る高度の複合体である。Strawson 自体が既に [3] で同定知識を同定記述とせず、更に広い同定知識の存り方を認めている様に (Strawson [5], p. 47) (このことは次章でも論ぜられる)、実際は固有名辞の有効な使用法はこの同定記述の原理にのみ依らないのだが、固有名辞の有効な使用法にこれが属しているのは確かな事であり、‘前提条件’が記号論理学の枠組で構成できる可能性を考える時、興味を引く主張として注目して良いと思う。

固有名辞と記述名辞は本質的に次の点で区別される。1) 形態的、2) 情報能力の本質的不定性と本質的一定性、3) 情報能力の潜在性と顕在性。

又、指示機能に関する限り、3) に依り、意味は前提されるだけで機能自体に関与しない。これより 4) 指示機能に関する本質的不関与及び本質的関与、が区別の一要点となる。1), 4) に関する限り Russell 的であるが、2), 3) に関する限り、意味が例え外属的であるにせよ表現の固有名辞性を決定する本質的要因と見做される所は Frege 的である。

注

- (1) Frege からの引用頁数は全て原論文からである。頁数は Patzig [1], [2] に明示されている。

- (2) 真理値が文の指示であるということは、私はドグマだと変えている。
(Frege [3]. p. 27, pp. 34-35). 彼はそれが正しいと主張するが、簡単に言えば、彼がこれを認めたのは、1) 文は空座を含まず、従って単なる内容でなく真理に関係するなら何かを名指す、という固有名辞論の文への拡張と、更に 2) 文と真理の関係は文と我々の理性行為の関係であり、従って ‘A は真である’ という様な文で表現できない特殊な関係がある、という二つの異った彼の理論的側面のアマルガムである。そこでは、‘A は B である’ を ‘A が B 一性を持つ’ として述語を実体化する、言わば Platonism 的発想が働いている。この点については Waragai [1] 51-67 で多少詳しく論じた。
- (3) 概念実在論とは次の様な主張を言う。非充足的表現も、それを含む文が真である限り何か実在の名である、という事である。例えば、“太陽は地球より大きい” は真であるが、この時表現 ‘太陽’、‘地球’ とともに実在の名である。さてこの時彼に依れば、表現 ‘...は一より大きい’ も何か実在の名でなければならない。(cf. Frege [11]. p. 86). これは Frege が真理値を実在と見做した事の理論的帰結である。
- (4) 彼は空名辞は、論理学上の対象とならないという観点から扱わない。だが、この種の名辞について彼が Logik 1897 in Frege [11], p. 41 で簡単に触れている事を断って置く。空名辞が論理学の対象とならない事は Leśniewski の *ontologia* (彼の量化理論) の名辞観に真向から対立するものである。
- (5) この表現は presupposition の関係を表現する。一般に論理的 presupposition は次の形の論理形式を持つ; A is impossible without B being the case. これは、「if A then B」とは異った論理形式である。これは実は擬似様相論理として展開することができるが、ここではその可能性示唆にとどめる。

3. 第三段階

Kripke はその講義録 ‘Naming and Necessity’ に於て彼がその中で記述説と呼びそれまでの名辞の指示についての主力説と特徴付けたものを論破した。が、講義録で批判の的となっている Frege, Russell の説はかなり歪曲されて叙述されている。この点は既に前節で修正されているので以後は所謂因果説に関心の的を焦ろう。因果説の主張者達はまず所謂記述説の批判から出発し、その理論的背景にある様相論理のモデル論 (= 可能世

界意味論)を十分考慮しながら記述説にかわる指示の理論を提出した。代表者は Kripke, Donnellan, Putnam 等であり、未だ完全な理論にはなっていないが新たな指示の理論としての姿を呈し始めている。本節では 1)記述説批判, 2)論理学的背景, 3)因果説の内容, について以下で述べてみよう。叙述は Kripke, Donnellan を中心とし、指示の理論としての因果説に限定することにする。以後固有名辞は(曖昧さが生じない限り)名辞と略記する。

記述説批判

新たな説の誕生は既存の説への批判から始まる。因果説の主張者達の批判はまず記述説の原理を定式化した上でそれへの反例を与えるという形をとる。批判の対象となる記述説の基本的主張をまず明確にしておこう。⁽¹⁾

Kripke はこれを6つの主張と1つの条件という形で (Kripke [3], p. 285), Donnellan は同定記述原理 (principle of identifying descriptions) として提示する (Donnellan [1], p. 360)。そしてこの原理は2つの主張から成立している。これらの主張や原理は共に名辞と記述の対応関係を密接につけることで名辞はその記述(の集合)で置換可能であることを述べている。⁽²⁾ここでは Kripke, Donnellan の主張を参考にした上で記述説の原理を提出しよう。⁽³⁾

P₁: 名辞の使用者はその指示対象が一意的に適合する記述の集合を持つ。

P₂: 名辞についての記述の集合が一意的にある対象に適合するならば、それがその名辞の指示対象である。

P₁ と P₂ を結合することで名辞の記述の集合はそれらが同じ指示対象を持つということから同一視できるという所謂記述説の主張となる。従って、P₁ と P₂ への反例を示すことで記述説の誤りを示すことができよう。⁽⁴⁾
〈P₁への反例〉我々が初対面の人を紹介されてその名を告げられたとしよう。その場合に Donnellan の言う論点先取的 (question-begging) 記述

以外の記述をその名に対応さす事ができるであろうか (Donnellan [1], p. 365). 「我々が今紹介された人」という類の記述しかできないであろう. 論点先取的記述は見かけの記述でしかない. 見合いの相手を見合いの時まで全く知らない人が相手の名前だけ知っていても会う前にその相手をどのように記述したらよいのであろうか.

＜ P_2 への反例＞ある人が著名な作家A, Bとパーティの席で談笑したとする. その人はA, Bの作品をそれぞれ知っているが初対面なのでどちらがAであるかわからない. 列席者は文学畑の人なのでA, Bについてはよく知っている. 談笑の間彼は失礼な気がしてどちらがAであるか聞く事ができなかった. その後の列席者達との談笑では「作品Cを書いた人」という記述でAを話題にできた. この時彼は誰もが一意的に同定できる記述を持ちながら, Aと呼ばれる人物を同定できない. つまり, 記述は彼にその指示者を与えてくれなかったのである.

これらの例から名辞の指示と記述の集合の指示は互いに他の条件ではなく, 両者はむしろ無関係であることが明らかとなった.⁽⁵⁾

上例ではある個人の名辞と記述の関係が問題となっている. 個人に限る必要はないのであるが, 意識的にこのような例にしたのは Kripke, Donnellan 共に個人の次元での語の使用を中心に考えているからである (Putnam の場合には集団への配慮がある). 換言すればこれは個人がある語で指示しようとする次元であり, 語が何を指示するかという次元の問題ではないのである. さて名辞と記述の集合が無関係となると両者の間をどのように考えたらよいのか. Kripke は, 記述はその名辞の意味を与えるのではなく「単に指示対象を固定化するのみである」(Kripke [3], p. 276) と言っているが, それは記述の役割がある名辞の指示対象を規定する際に固定化の条件として働くのではなく, 単に記述を通して1つの指示対象が定まるということであり, 従って Donnellan の表現によれば 同定記述原理は偽であるということになる.

論理的背景

既に記述説の不十分さを示したが、これのみでは即因果説の誕生とはならない。その裏には意味論の大きな変化があり、因果説はその論理的に補えない部分を哲学的に補ったものであるという見方もできる。この見方では Kripke の因果説の picture, Donnellan の歴史説は共に固定指示子 (rigid designator) の指示の仕方を説明するため必要となった説だということになる。このような見方を許す論理的背景は明らかに様相論理学の Kripke-モデル構造 (Kripke-model structure) である。そしてこの構造を基礎とした可能世界 (possible world) 概念が中心となっている。⁽⁶⁾ Kripke は可能世界概念を用いて固定指示子の定義を与え、この指示子の形而上学的、認識論的与えられ方を a priori-必然的の区別を導入することで表わしている (Kripke [3], Lecture 1)。固定指示子の適否については Donnellan, Putnam 共に異論は出さない。可能世界とはある Kripke-モデル構造の要素、つまり現実の世界を含む古典論理のモデルの一定関係を満たすクラスの要素である。従って論理的には可能世界に何ら実在論的性質を見る必要もないし、この現実世界と全く異質な‘あの世’の性質を見る必要もない。可能世界とは単に現実世界の論理的に可能な組み換えによって約定 (stipulate) されたものであり経験的に発見されたものではない。⁽⁷⁾ (Kripke [3], p. 267)。

1つの Kripke-モデル構造を考えよう。これは古典論理のモデルの集合とそれらの間の一定の (順序的) 関係を与えることで定まるが、この関係は各モデル間のパラメーターの変域又は定項の違いによる言語拡張の双方いずれからも定めることができる。通常の言語と世界の対応に照して考えると、パラメーターの変域を拡大するということは拡大された変域が言語によって把束可能、つまり変域の要素が定項で把握できることである。変域内の要素が表現可能であることを示す最も単純な、しかし冗長な方法は要素の1つ1つが望まれた場合にその言語で表現可能であるようにする

ことであり、これは述語論理の言語では定項による表現方法である。さてこの定項は1度言語に導入されるとその可能世界すべてに於て同一対象を指示するものとして働く。論理モデルとして考える限りでは定項のみならず他の記号もその働きはあらゆる可能世界で同一である。問題となるのは言語内の記号はすべての可能世界に対して同じ働き方をするという論理的約定を日常言語に適用した場合、論理学上は出てこない認識論上の問題が生ずる点にある。定項の拡張は論理学上は単に言語に導入されるが、問題は我々がその導入を可能世界の1つであるこの世界で、しかもこの世界にある事と物を使ってしか遂行できないという点にある。

Kripke は必然性—偶然性の区別をモデル構造内で定義された形をそのまま用い、それに認識論上の a priori—a posteriori の区別を組合わせることで表の如き4つのすべての場合が可能であることを示した。⁽⁸⁾ この表内で

	a priori	a posteriori
必然的	○	○
偶然的	○	○

Kant 以来の視野とは遙かに異なることを示すのが偶然的—a priori な言明の存在である、他はその可能性が考え易いがこの言明については Kripke の例を引いておこう (Kripke [3], pp. 273–275). 長さ ‘1 m’ はパリにある基準棒 S の長さ

である。「棒 S は 1 m である」という言明は定義であるが、果して必然的であろうか、前述の Kripke の言によればこの定義は指示対象を固定化するのに用いられているのである。そして‘メートル’の定義はパリの棒 S によってしかなされないということはないのである。定義のために用いられたものは偶然的なものなのである。我々がパリの棒 S は 1 m でないかもしれないと想像できるのは偶然的だからである。これは又‘1 m’は固定的であるが‘パリの棒 S の長さ’は非固定的である故、言明「パリの棒 S は 1 m である」は偶然的であると言い換えてもよい (ibid., p. 275).

上例は論理学上の定項導入と実際のその違いを明示している。長さ

‘1 m’ はどこにも存在しないが、我々はそれを尺度としてこの世界で定義せねばならないのである。この種の例は時刻、熱、温度等々……枚挙にいとまがない。

固定指示子は「すべての可能世界で同じ対象を指し示すもの」(Kripke [3], p. 269) と定義されるが、これは前述の定項そのものである。そして日常言語では固有名辞に対応する。が、それに尽きるものではない。論理学上は述語も又固定的であるが、我々の経験の介在する日常言語ではその範囲は断定できない。従って問題となるのは、1) すべての固有名辞は固定的であるか否か、2) 固有名辞以外にどのような固定指示子があるか、あるならばそれはどのようなものか、である。2) についてはまず種々の尺度がある(前例参照)。Putnam は物質語も固定的であるとしている(Putnam)。又1)については Ziff は多くの反例を出して名辞の非固定的使い方を示している(Ziff)。これらから現状では特に一般名辞についてそれが固定的であることの必要十分条件はまだ与えられていないと言えよう。

以上のことから因果説はその基礎となる論理的枠組は従来の記述説のそれと同様一応明確となっはいるが、日常言語にそれを応用する場合、記述説と同じ類の問題を抱えていると言える。

因果説の内容

因果説が何か具体的成果を既に持っている訳ではない。因果連鎖(causal chain) と呼ばれる中心概念そのものについても十分整備されてはいない。従って因果説の簡単な見取り図とその問題点を以下に述べることにしよう。因果説内での積極的寄与は Kripke の固定指示子を固有名辞に対して分析したのが Donnellan であり、それを物質名辞について遂行したのが Putnam であるということで尽きよう。

Kripke は因果説についての説明をあくまで記述説にかわる better picture に過ぎないとしているが、その内容は名辞での指示はその使用者を名辞の指示対象に関係付ける因果的連鎖の存在を含んでいるというもので

ある (Kripke [3], pp. 302-303). Kripke はこれ以上のことは述べないが、より簡明な Donnellan の考えを引用しておこう。⁽⁹⁾

話者が個物を指示し、そしてその何かを述語付けることを意図して名辞を用いる場合、指示がうまくゆくのは話者がそれについて何か述語付けるために意図したものがそれが何であるかの歴史的に正しい説明に入ってくる個物が存在する時である (Donnellan [2], p. 16).

従って因果説とは、ある名辞を用いての話者（とその行為）と、世界内の対象との関係を記述説がある記述又は十分な数の記述の集合による性質をある対象が満たすことで名辞を把握したのに対し、名辞と対象との間の因果的（歴史的）連鎖によって指示を理解しようとしていると言える。因果連鎖ということが従って明確にされねばならない訳であるが、例えば個人の発話行為の中での場合と、物質語の科学的知識活動の中での場合とでは極めて異なっているであろうことが推察できる。さらに因果説は従来記述説によって取扱われてきた諸問題についても記述説と同等以上の納得のゆく説明を用意せねばならない。そしてこれは未だほとんど手がつけられていない。既述の Putnam, Donnellan によるそれぞれ物質語の因果連鎖⁽¹⁰⁾、否定的存在言明についての扱い、因果連鎖の定義と指示対象の変化に対する Evans, Devitt の考え、Kripke の同一性への応用が枚挙できる程度である⁽¹¹⁾ (Putnam, Donnellan [2], Evans, Devitt, Kripke [2], [3].). まず Kripke の補論でも言及されている Evans の因果連鎖への反例を考えてみよう。Evans の例は‘マダガスカル’の指示についてである (Evans, p. 196). この語は原地語ではアフリカ大陸の一部を指していたがマルコ・ポーロが誤って島の名と理解したため以後それが定着して現在の‘マダガスカル島’になってしまった、と言うものである。因果連鎖を辿った場合、アフリカ大陸の一部に到達しそれが指示対象ということになるが明らかに現在の使用はそうではない。Kripke はこの反例に対し現在の使用意図は元来のそれを無視すると言う社会的性格を物語っていると言うだけ

である (Kripke [3], pp. 768-769). これに対して Devitt は洗礼による名辞導入という Kripke の定義に加えて, その指示対象がそれとの因果結合によって決定される名辞の最初の使用によっても連鎖は成立する, とする (Devitt, p. 199). この反例, 並びに Devitt の再定義は名辞の指示対象の変化の問題を引き起す. 因果連鎖を数種類認めると言うことは1つの記述から記述の集合への移行を想起させるばかりでなく, それぞれの連鎖が異なる指示対象と結合している場合も含んでいる. 指示対象との2つ以上の異なる連鎖, そして連鎖上での指示対象の変化は部分指示 (partial reference) という考えを思いつかせるかも知れない. が, 部分指示を認めてしまうと, 「耶馬台国は九州にあった」と「耶馬台国は畿内にあった」はどちらが正しい言明であると主張したよいのか. 「耶馬台国」はどちらの地域に於ても現段階では部分的に指示対象を持っているのであるから. これらの例からの要請は連鎖が不明な名辞をどう扱うべきかと言うことである.

次に Donnellan の否定的存在言明の因果説内での説明を紹介しておこう. 彼はまず block という概念を定義する (Donnellan [2], p. 23). 名辞使用の歴史的説明が, サンタクロースの存在を信じていた子供がある時点で「サンタクロースは存在しない」と言われて以後はそれが fiction であったことを悟るような, 同定される指示対象を除外する出来事で終る時, それを歴史内の block と呼ぶ. 「サンタクロース」の名辞導入から「サンタクロースは存在しない」までが block である. この概念を用いて Donnellan は次のように否定的存在言明を考える.

もしNがある個物を指示することを意図して述語的言明に於て用いられる固有名辞ならば, 「Nは存在しない」が真であるのはその使用の歴史が block に帰する時であり, そしてその時に限る (Donnellan [2], p. 25). この規則によって「サンタクロースは存在しない」は (筆者には) 真となる. Donnellan 自身 block の妥当性についてはそれが存在言明を扱う場合の ad hoc な概念であることを認めている. 確かに彼の言うように block

という説明概念はその根拠、定義が曖昧であるが、何よりの欠点はそのような概念を用いないと否定的存在言明が因果説内で扱えないという点である。これは論理的には単に定項の消去という問題なのだが、定項導入の際に生ずる問題以上の困難な問題を含んでいると言えよう。

注

- (1) この所謂記述説とは1950年代以降の指示理論についての一般的見解を言い、Strawson, Searle の考えに基づくものである。
- (2) さらに Putnam は意味と心理内容、外延について同じような主張をしている (Putnam, p. 700)。
- (3) Kripke はさらに名辞と記述の置換は a priori に可能で、必然的でもあるとしている。又、Donnellan は論点先取の記述を排除する。
- (4) P_1 , P_2 の反例については Kripke [3], Donnellan [1] を参照。他の多くの例が示されている。
- (5) Putnam も類似の仕方で意味と指示の無関係なことを示している。(Putnam)
- (6) Kripke の論文 (Kripke [2], [3]) は彼の一連の様相論理についての研究に基づいている。言わば様相論理の指示の理論への応用なのである。その様相論理の成果、並びに2の叙述については Kripke [1] を参照。
- (7) 以後の叙述は詳しくは (西脇) を参照。
- (8) この区別による言明の存在については全く議論がない訳ではない。例えば (Fitch) に於ては必然的—a posteriori な言明の存在が疑問視されているし、(西脇) では四つ区別の扱いについては異なった説明がなされている。(Fitch) の議論については付記を参照。
- (9) Kripke と Donnellan の因果説の方法が全く一致しているとは言えない。そのずれは Donnellan が因果連鎖を歴史的連鎖に限っている点にあるように思われる。
- (10) (Putnam) に対する批判・修正は (Zemach) 参照。Zemach はそこで物質語と科学的術語を同じように扱えないことを示し、物質語の扱いには (Putnam) にはない歴史的説明を加えることで修正できることを主張している。
- (11) 同一性の問題は本論の対象外であるが、言明の区別と関連して付記を参照。

付 記

Kripke は 偶然的—a priori, 必然的—a posteriori な言明の存在を用いて心身

一元論の主張の否定 (Kripke [2], 注 17, pp. 161-164, [3] lecture 3), Frege 以来の明けの明星=宵の明星と金星=金星の違い (Kripke [3], pp. 303-309) の説明をしている。両者の説明方法を以下で示し, Fitch の提案に答えておこう (Fitch). Kripke の論証は次の形をとる。

A (金星の例)

1. a, b が固定指示子で $a=b$ ならば, $a=b$ は必然的である。
2. (a posterioriに) 明けの明星=宵の明星
3. 明けの明星, 宵の明星は共に固定的。
4. 故に 1 より明けの明星=宵の明星は必然的

B (心身一元論)

1. Aの1と同じ。
2. α (=私のある時点での痛み), β (=私のある時点でのある状態の脳) は共に固定的。
3. $\alpha=\beta$ は必然的でない。
4. 故に 1 より $\alpha \neq \beta$ 。

この結果は, 科学の進歩によって $\alpha=\beta$ は経験的に実証されるという一元論者の主張の否定となっている。

さて Fitch の A に対する論証であるが元の形式は (Fitch p. 244) を参照していただくことにしてその形式を借りて次の推論を構成してみよう。

1. 我々は a posteriori に「明けの明星=宵の明星」を知っている。
2. 金星, 明けの明星, 宵の明星は固定的。
3. 「金星=金星」は「明ける明星=宵の明星」と同一の命題である。
4. 従って, 我々は a posteriori に「金星=金星」を知っている。

結論 4 は偽である。「金星=金星」は a priori である。これはこの推論がおかしいという事であり, 同じ形式の Fitch の推論も誤りであるということになる。誤りの原因は仮定 3 (Fitch p. 244) にある。彼の推論での必然的は論理的必然ではなくそれより弱い様相的必然性なのである。($\{\alpha \mid \alpha$ は論理的に必然 $\} - \{\alpha \mid \alpha$ は様相的に必然 $\} \neq \emptyset$) 「明けの明星=宵の明星」は論理的に必然でない故に代入はできないのである。

★ ★ ★

0, 1, 2 は藁谷の, 3 は西脇の分筆による。

Bibliography

Devitt, M., Singular Terms, *Journal of Philosophy*, LXXI, 7. 183-205.

Donnellan, K., [1] Proper Names and Identifying Descriptions, in *Sema-*

- ntics of Natural Language*, (eds.) D. Davidson and G. Harman, D. Reidel, 1972, 356-379.
- [2] Speaking of Nothing, *Phil. Review*, 83, 1974, 3-31.
- Evans, G., The Causal Theory of Names, *Aristotelean Society*, Supp. Vol. XLVII, 1973, 183-208.
- Fitch, G., Are There Necessary a posteriori Truth? *Phil. Studies*, 30, 1976, 243-247.
- Frege, G., [1] Begriffsschrift, 1879, Halle.
- [2] Funktion und Begriff, 1891, reprinted in Patzig [1], 18-39.
- [3] Über Sinn und Bedeutung, 1892, reprinted in Patzig [1], 40-65.
- [4] Ausführung über Sinn und Bedeutung, 1892-1895, in Frege [11], 25-34.
- [5] Über Begriff und Gegenstand, 1892, reprinted in Patzig [1], 66-80.
- [6] Einleitung in die Logik, 1906 August, in Frege [11], 74-95.
- [7] Was kann ich als Ergebnis meiner Arbeit ansehen? 1906, in Frege [10], 200.
- [8] Der Gedanke, 1918-1919, reprinted in [2], 30-53.
- [9] Erkenntnisquellen der Mathematik und der Mathematischen Naturwissenschaften. 1924/25, in Frege [10], 286-294.
- [10] *Nachgelassene Schriften*, Felix Meiner, 1969.
- [11] *Schriften zur Logik und Sprachphilosophie*, Felix Meiner, 1971.
- Kripke, S., [1] Semantical Consideration on Modal Logic, *Acta Philosophica Fennica*, 16, 1963, 83-94, reprinted in *Reference and Modality*, (ed.) L. Linsky, Oxford, 1971, 63-74.
- [2] Identity and Necessity, in *Identity and Individuation*, (ed.) M. Munitz, New York Univ. Press, 1971, 135-164.
- [3] Naming and Necessity, in *Semantics of Natural Language*, 253-355, 763-769.
- Linsky, L., *Names and Descriptions*, Univ. of Chicago Press, 1977.
- Mckinsey, M., Divided Reference in Causal Theories of Names, *Phil.*

- Studies*, 30, 1976, 235-242.
- Ockham, W., *Suma Logiczna* (Polish Translation of *Summa Logicae*), Warszawa, 1971.
- Patzig, G., [1] *Funktion, Begriff, Bedeutung*, Göttingen, 1971.
[2] *Logische Untersuchungen*, Göttingen, 1976.
- Putnam, H., Meaning and Reference. *Journal of Philosophy*, LXX. 19. 1973. 699-711.
- Russell, B., [1] On Denoting, *Mind*, 1905, reprinted in Russell 41-56.
[2] Knowledge by Acquaintance and Knowledge by Description, 1910/11, reprinted in Russell [4], 209-232.
[3] *Principia Mathematica*, Vol. I, Cambridge, 1910.
[4] *Mysticism and Logic*, London, 1919.
[5] *Philosophy of Logical Atomism*, 1918, reprinted in Russell [7], 177-281.
[6] *Introduction to Mathematical Philosophy*, London, 1919.
[7] *Logic and Knowledge*, London, 1956.
- Searle, J. R., [1] Proper Names, *Mind*, 67, 1958, 166-167, reprinted in Strawson [6], 89-96.
[2] The Problem of Proper Names, reprinted in *Semantics*, (eds.) Steinberg and Jakovovits, Cambridge, 1971, 134-141.
- Strawson, P. F., [1] *Individuals*. 1959, Methuen.
[2] On Referring, *Mind*, 59, 1950, reprinted in Strawson [4], 1-27.
[3] Identifying Reference and Description, *Theoria*, XXX, 1964, reprinted in Strawson [4], 75-95.
[4] *Logico-Linguistic Papers*, Methuen, 1971.
[5] *Subject and Predicate in Logic and Grammar*, Methuen, 1974.
[6] *Philosophical Logic*, Oxford, 1967.
- Waragai, T., Assertion and Rejection in Frege, (Manuscript),
- Zemach, E. M., Putnam's Theory of the Reference of Substance Terms, *Journal of Philosophy*, LXXIII, 1976, 5, 116-127.
- Ziff, T., About Proper Names, *Mind*, 86, 1977, 319-332.
- 西脇与作, 可能世界の論理的構図 (準備中)